

A地区日赤奉仕団による地域貢献 「そっと見守り隊」への取り組み支援

荒 引 眞由美

【はじめに】

当院は、A小学校区の300床の地域医療支援病院である。この地域は、元気な高齢者人口が多く、特に独居高齢者と高齢者夫婦のみの世帯が多い地域である。A地区日赤奉仕団員は平均年齢70歳代後半で、日頃は当院で、ボランティアや災害救護訓練の炊き出しなど活躍している。そこで、A小学校区の日赤地域奉仕団を対象に、地域包括ケアシステムの基盤整備として地域住民が自主性をもって主体的に活動することへの支援を赤十字病院の健康生活支援講習指導員として実践したのでここに報告する（図1）。



図1

【目 的】

- 1) 地域奉仕団の高齢者支援のためのグループ活動が開始できる。

- 2) 定期的に地域に必要な高齢者支援活動を検討することが出来る（図2）。

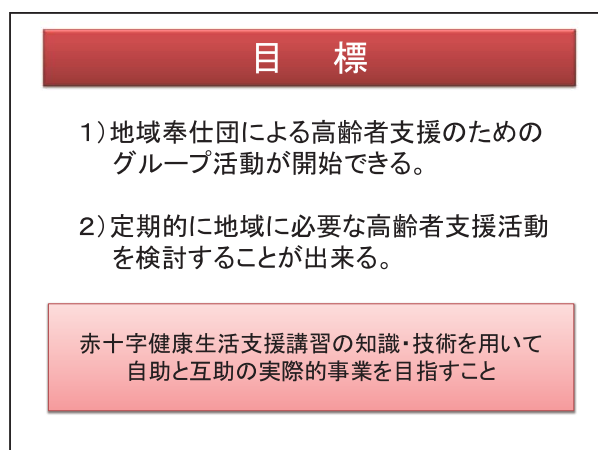


図2

【実施と結果】

2016年5月A地区日赤奉仕団員対象講習会（導入編）ころとこころの架け橋講習24名受講。2017年7月 健康生活支援員養成講習にA地区日赤奉仕団員14名合格、4カ月1回のフォローアップ研修を継続している（図3）。

2017年10月にA地区（小学校区）内に2グループ（6人と5人）を結成し、地域分析として自分の周り的高齢者独居・夫婦のみ世帯の確認等を行った。次に支援内容の検討をグループワークした。そして、活動計画立案を行ったが「できない理由」が多く、次回に持ち越した（図4、5）。

2018年1月の定例研修会で「そっと見守り隊」を結成した。2月から周りの気になる高齢者を遠くからそっと見守っている。「朝はカーテン

実施と結果

1年目：2016年5月A地区日赤奉仕団員対象導入編
 ところどころの架け橋講習24名受講

グループワークの
ファシリテーション

- ・自助への気づき
- ・生活支援ニーズ
に気づき
- ・システム作りが
大切であること
- ・知識と技術が必要
であること

を引き出す
自主性・主体性
に繋がる
自分の未来
に繋がる

ところどころの架け橋講習内でグループワーク

テーマ：「住み慣れた地域で、いきいきと暮らすためには」

1) わたしにできること

2) わたしがしてもらいたいこと
 (例) 一人暮らしで、足腰が弱ったら
 軽い認知症になったら
 車椅子が必要になったら

3) 私たちがこれから地域としてやりたいこと
 (地域で支えあうための仕組みづくり)

自助への気づき

どうにかこうにか

生活支援のニーズへの気づき

システム作りへの気づき→その前に知識と技術が必要と気づく

図 3

が開いているか・新聞は取り込まれているか・夕方は電気がついていないか」などを1人が2～5人程度担当し見守っている。異変があった時は当院の在宅支援室に相談することとした。連絡を受けた在宅支援室は、当該の地域包括支援センターと協働するよう取り決めを行った(図6)。

2018年5月よりA公民館健康相談日(行政)に日赤奉仕団と当院の健康生活支援講習指導員によるサロンを同時開催することを決定した。サロンでは、健康生活支援講習で学習した「癒しのハンドケア」を実施している。健康相談に來られた人を対象にハンドケアを行うことで、地域の住民とのコミュニケーションが深まることと地域の心配な高齢者の情報が収集できる(図7)。

A小学校区の日赤奉仕団対象 赤十字健康生活支援講習支援員養成

2年目：2017年7月
 赤十字健康生活支援講習支援員養成に
 A地区日赤奉仕団員14名合格

知識と技術の大切さに気づく

- ☑忘れてしまわないよう定例で勉強したい。
- ☑こんな知識を知っていたら、もっと良い介護ができたのに、もう終わってしまった。
- ☑元気なうちに誰かのためになるような活動がしたいと思った。
- ☑自分の将来のためになった。

図 4

「そっと見守り隊」を結成

3年目：2018年1月の定例研修会で決めたこと

- ・「心配な方をそっとみまもう」
- ・「朝はカーテンが開いているか」
- ・「新聞は取り込まれているか」
- ・「夕方は電気がついていないか」

などを1人が2～5人程度担当し、異変があった時は、当院の在宅支援室に相談すること

活動してきてよかったこと(聞き取り)

意識が高まり、いろいろな人に話すようになった。
 見守られている人も知っていて留守を知らせてくれる。
 心配な時は声かけあうようになった。(台風)

図 6

2017年10月にA地区(小学校区)内に 2グループ(6人と5人)を結成

- 1) 地域分析：自分の周りの高齢者独居・夫婦のみ世帯を確認
- 2) 支援内容の検討
- 3) 活動計画立案を行ったが、「できない理由」が多く、次回に持ち越した。

実際の岐阜モデル：拠点は当院
 小集団2Gとリーダー2名
 全員が健康生活支援講習支援員

拠点

小集団

リーダー
集団2人

5～6人

4ヶ月1回のフォローアップ研修を継続している

図 5

「ちょっとしたサロン」の開始

2018年5月よりA公民館健康相談日(行政)に
 タイアップしてサロン開始

内容：地域の高齢者の方々にハンドケアを実施

活動してきてよかったこと(聞き取り)

「地域の心配な人の情報が聞けた。」
 「ハンドケアで喜ばれてうれしかった。」
 「自分も話ができて良かった。」
 「保健師さんやB病院の看護師さんもいるので
 ころ強い。」「楽しかった。」「続けたい。」

図 7

【ま と め】

赤十字が目指す自助と互助の地域作りには、地域奉仕団による高齢者支援活動の継続が重要である。実際に活動している地域奉仕団員は、定期研修会に参加することで意識を低迷させないよう維持できると言っている。それには、ファシリテーションする指導員と、相談できる拠点（当院の在宅支援室）が必須である。そして、これが地域包括支援システムの基盤となると考える（図8）。

**赤十字健康生活支援講習指導員・病院
としての取り組み支援のまとめ**

- 定期研修会に参加することで意識向上と維持ができる。（4カ月に1回）
- 主体性・自主性を重んじた支援が必要である。
- 地域奉仕団による高齢者支援活動の継続には、ファシリテーションする指導員が必要である。
- いつでも相談できる拠点(当院では在宅支援室)が必須である。

これらが地域包括支援システムの**基盤**と考える

図 8

